北海道新聞

発信 地域から

弟子屈

自立を目指して

不登校、ひきこもりの若者支援

㊥

農作業から生き方学ぶ

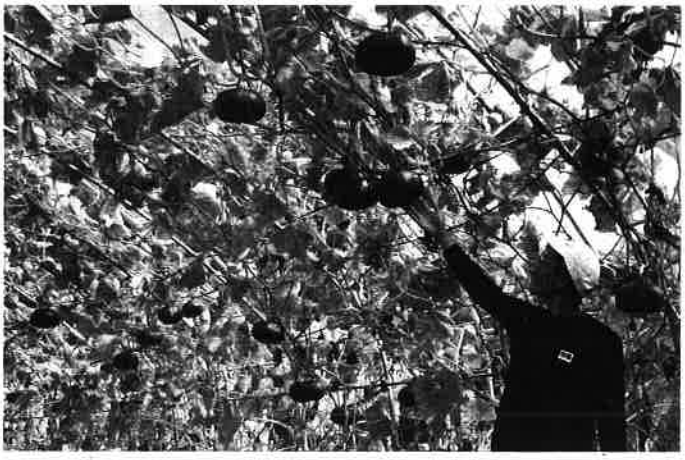
ビニールハウスの天井を埋め尽くすようにカボチャの実や葉が宙にぶら下がっていた。「この栽培法はカボチャ全体に日光が当たり熟成が進みやすいんです」。収穫を控えた9月上旬、ハウスがある農園を管理する大橋正碁さん(36)はカボチャに優しく触れ、そう話した。

釧路管内弟子屈町の温泉旅館に、不登校やひきこもりを経験してきた若者を支援する塾が昨年10月に開設したのに合わせ、近くの山の麓に約1㌶の農園がオープンした。農園は、大越俊夫塾長(81)の教育理念に共感し、神戸市でカフェを経営する「ビービーシープ」が運営する。

命の循環体感

弟子屈の塾生7人は昨年から同社の大橋さんと有機肥料を用いた土作りに取り組んできた。道外の都市部出身者が多く、土やミミズに触れた経験がほとんどなかった。

農業を通じて弟子屈の塾生を支援する大橋さんも小学生の時、阪神大震災での被災経験を機に不登校になった。当時、大越塾長が神戸で開いていた塾に通い、授業を通じて農業の魅力に触れ、専門学校で学んだ。大橋さんは「水、土、草木に触れることで命の循環を体感してもらいたい」と語り、塾生を見守る。



ビニールハウス内で実ったカボチャについて語る大橋正碁さん

塾生にとって農作業はコミュニケーション力や社会性を養う就労体験の場でもある。塾生らはトマトやブルーベリーなども栽培し、8月には収穫体験ができる観光農園を開園。直売などを企画した10月の収穫祭は500人超の住民らが訪れた。

中学時に不登校になり、通信制大学などを経て、弟子屈の塾に入った篠原颯爽(はやあき)さん(23)は「心を込めてしっかり育てると、作物は応えてくれることを学んだ」と話す。自分の手がけたトマトの味は格別だったといい、弟子屈で農業に携わる生き方を模索する。

道の駅で販売

神戸と弟子屈で不登校生らを支援する大越塾長は長年、教育現場に農業を取り入れてきた。「時間に追われ、すぐに成果を求めてしまう現代社会は閉塞(へいそく)感に苦しんでいる。焦らず、地道な努力が実を結ぶ農業を通じた教育は、可能性に満ちている」と強調する。

塾生らが育てた野菜や果物の味は、評判も上々だ。地元の道の駅でも売られ、販売担当者は「カラーミニトマトが人気。来年はより多くの農産物を出荷してほしい」と期待する。カフェの食材に使うビービーシープの松王真由美社長も「弟子屈で育ったブルーベリーは神戸のお客さまに高い評価を得ている」と話す。

雪が降り積もる農園で塾生らは来春、農作業を再開する。来年はサツマイモの栽培に挑戦する。

（弟子屈支局　高橋力）